

これの小床を仮の喪屋と齋い定めて暫時置き据え安め奉る故天理教△△分教会役員△△分教会長△△△刀自の御柩の御前に慎み敬い歎かいて白さく

久方の空行く月の清き光りにも立迷う浮雲の障りあるが如く 春山に咲き乱れる花の梢にも吹き荒ぶ嵐の嘆きある如く あわれ汝刀自はもかりものという世の慣い得免がれ給わずまだ心残れるこれの現世を退向になされしは悲しとも悲し口惜しきとも口惜しき限りにぞある

汝刀自は明治の元勳△△△伯爵の孫たる△△△△△伯の胸の病を我が家に引き取りて真実もて看護に当たられし頃 家政婦として派遣されし後の△△分教会二代会長△△△△△を通じてこれのお道に引き寄せられ 不幸にしてその義兄を最後まで看送りし後 汝刀自の弟たる故△△△△△大人の肺病を救けむものと自らは付き添いとして天理教校別科に入られたり 紅白粉をさらりの捨てきんしゃの着物を真黒な教服に着換え朝は朝星夜は夜星を戴き表に出ては竹箒をとりうちにありてはお手洗いを次々ともてひのきしんに親しまれし ああ汝が刀自の若き日の御姿四十五年前とは云いながら我が臉に懐かしく焼き付いたり 親里天理の街を道行きながら粗末にされし釘の一本一本を拾われ六ヶ月の後石炭の箱一杯をお包みにかえて甘露台に御供えされしは 慢性の蓄膿症から美事に解放されしは汝刀自の親神に出会われし最初の体験ならん げに「人を救けて我が身救かる、救ける理が救かる」とか背の君故△△△大人を慕いて我が家を訪れ恥も外聞もなく振る舞う女又女の醜態を汝刀自は眼に一杯の涙をためつつ 教祖のおかのかけられしひながたを辿りつつ真心なる接待に身を碎かれる中奇しくも 汝刀自積年の子宮の重き患いの御守護を頂かれたり ああ汝刀自の前生のいんねんの深さの故にやようやくにして夫婦の中が元一日に帰りし頃△△△大人は又胸の病で此の世を去りたり かくて母屋を払われ世界たすげにかかる赤飯をたかれし教祖の道すがらそのままに 自らの宅を今なる上級の神殿普請に伏せ込まれ 文字通りの零から出直し○○寺○○を中心にして南無天理王命の神名を流されたり ああ偉なる哉汝刀自一人の女性の身をもって遂に△△分教会を設立されたり この木の香新しき神殿のあの隅この隅にも四十年に亘る汝自身の全力投球の苦勞が伏せ込まれたり されどその中を終始笑顔をもて貫かれしがおぢばがえりの団体列車を一両づつ先頭から後尾に至るまで赤たすき赤腰巻きでどじょうすくいをしながら歩かれし陽気あふるる御姿 これの小床の写真の中に秘められたり

あわれ空蟬の世は定め難きものか家族親族及△△△につながらる道の子達と共にひたすら親神に乞い祈み奉り元の如く壮健なる体に帰りまさんことをし願いけるにその甲斐もなく医師の業もすべて尽き果てて この年この月○日齢○○才を生きの涯りとこれの神殿普請を来世につづく花道として逝く水の還らぬ如く入る月の影消ゆるが如く惣ちに朝露のごと夕露のごと果なく出直し坐しつるは云わむ術為む術知らに今更に夢に夢見る心持なむあわれ悲しきかもあわれ悔しきかも

今日よりは教の理を取り次ぐ汝刀自の言葉了えずやなりけむ明日よりは教祖のひながたを辿る汝刀自の御姿永久に見えずやなりけむと雨雲の空かき曇る心地なもするを

人々暗夜に灯火を失うが如く漂う船の舵なきが如く憂い惑い枕辺に棲這い脚辺に匍匐い嘆き悲しみ慕い奉るも現世の人の理なれど 身退かりし人の蘇るべくもあらず今は御教えの定め式のまに／＼一世の終の式儀仕え奉りて永き別れを告げ奉らくと御前に御酒御食海川山野の味つ物を捧げ奉りて事の由を告げ奉らくを平らけく安けく諾い給いて我が親神の恩恵を思い頼み百足らず八十の隈路を迷う事なく唯一筋に親神のふところに行き奉りて 遺れる嫁や孫四人を始め親族はもとよりこれの△△△につながらる△△△布教所以下道の子供達を己が向々あらしめ給わず清き赤き直き心もて先ずは眼先に迫れる教祖九十年祭みふの仕上げのつとめに働き奉らしめ給い汝が遺骸は千代の住所と定め奉れる奥つ城所に平らかに安らかに出て立ち給い 汝刀自は再び新しき着物を召されていち早くこれの世に出直し給へと上級に対する本席的功績を深く感謝しつつ露けき袖の涙をはらい謹み敬いて白す